

假名遣改定案抗議

木下 李太郎

(與謝野氏、同夫人、石井柏亨氏、竹友藻風氏の驥尾に附し、一夕論議せるものの速記のうちより)

わたくしは今度の假名遣の問題、並に少し以前の漢字制限の問題に就いて、その細目に互ることは未だ之を詳にしませぬ。一體に國語、文字に關しては十分の教育を受けないので、假名遣、其他日本支那の古典に就いてはつきりとした知識を持つことが出来なかつたのでありますが、併しこの問題一般の傾向に就いては自分だけの意見を持つてゐるのであります。只今「鷗外全集」第二卷で森先生がこの問題に就いて抱いて居られた意見をざつと拜見しましたが、わたくしもそれに同感であります。

抑も今度の假名遣の問題にしる、或は前回の漢字制限の問題にしる、その決定を見た動機となるものに二つあると思ひます。第一は多數の便宜の爲めと云ふこと、即ち便宜

主義、多數決主義。第二は教育上の能率を増さうといふこと、即ち能率主義。この二つの考が重なる動機のやうに見受けられます。猶此外にももう一つ動機があつて、前二つの動機に比して劣ること無き重要なものでありますが、併しそれは明かに國語調査會の委員其他の人々の意識には上つて居ないやうであります。

さて第一の動機から云ふと、在來の假名遣に從つて國語を書き表はすと云ふこと、又は漢字を正しく書き、それを多く用ひると云ふことは、現在に於て一般國民が堪へられない所であるから、多くの人の歩み易い道に從つて、即ち便宜主義を土臺として、新假名遣法を定め、漢字の使用を局限し、それを文部省の權威或は調査會の權威で教育に適用し、引いて一般に通用せしめよう、とする考、云ひかへれば學術上の詮議を顧慮しないで、専ら多數者の便宜主義に權威を與へようとする考が第一の動機であります。

多數便宜の主義は我國現代の病弊の一であつて、その例をこの問題以外に求めると、或は國民の禮式、或は國民の服裝と云ふ風な上にも見受けられる。例へば帝劇の如き我國一流の劇場へ行くにも、或は宿屋の襦袍を着て行つたり、或は帽を被つたままで學生が演戲を見たり、或は慕間にドアを開閉したり、さういふ亂雑な行狀をして居ます。また電車の乗り降りに先を争ひ、或は電車の中で人の足を踏んで謝りもしない。或は電車や汽車の中で容易く喧嘩をするといふ風なことの多いのは、現代になつて國民の行儀が

著しく悪くなつたと解釋する外はありませんが、只今の日本は何事も混雜した過渡期の状態に在つて、已むを得ないので、官憲の力、或は教育者の力も及ばないのであります。言はば默認するより外に仕方が無いから默認して置くと云ふ状態であります。西洋に於てはいろいろなデモクラシイの問題があつても、併し儀式を要する所は儀式を用ひ、規則を要する所は規則を用ひて居ますが、この點になると、只今の日本は甚だ無秩序であり亂暴であります。それで若し何事も多數の便宜に従ふことが最も妥當なことであると云ふ便宜主義に由るならば、今の公衆が電車に乗り芝居を見る不作法な状態を默認する以上に、之に權威を與へて然るべきであると考へられる。話が甚だ極端になつたやうですが、便宜主義たることに於て、假名遣や漢字制限の問題も全くその關係はこの不作法主義と並行してゐると思ひます。

猶他の文化の方向で見れば、日本に於て現在用ひられてゐる建築の様式は、維納に於て始められたセツションと云ふ風が輸入されて便宜主義に墮落し出したのであります。今もさう云ふ風なものが新しい建築の上に重に行はれて居ます。それから繪畫にしても、勞せずして安易に功を收めようとする風があります。例へば日本畫に於て以前帝展の賞に入つた者は、筆で線を書くことが自分の力で困難な爲めに木炭で書いて、さうして其上に繪具を引くやうな事をしました。遠くから見ると如何にも達筆に見える

が、近づいて見ると木炭を用ひたことが解ります。また、現に巴里へ留學してゐる畫家にアカデミイの教育を受けようとする者は殆ど一人も居ないと云つて宜しい。誰も皆、彼國で最近流行の人の遣つた所から學び始めるので、伊太利或は希臘の古美術を鑑賞することも出来ないやうな有様になつて居ます。かういふ風な状態が只今の日本の精神的文明一般の上に於て見られる所の便宜主義的傾向であると思ひます。

所でかう云ふ混亂不作法の状態を矯正するために軌範を與へようとする、どうしてもやはり歴史的の考慮といふものが必要になります。無論わたくしは軌範といふものがあつて欲しいといふことから云ふので、かういふ渾沌たる今日の状態が善いとは決して思はない。さて之に軌範を與へる場合、儀式とか風俗とかいふものは變遷するから、歴史的遺物であるとも云はれますが、併し文字及び假名遣に於て我々が軌範を定める時に用ひる歴史的の考慮といふことは、儀式や作法の軌範を歴史的の傳習に求める以上の事であつて、其事を學問的に明瞭に理解するには、どうしてもその歴史を熟知することが必要であります。わたくしが汽車中で偶ま讀んだ、レオン・ドオデエが去年佛蘭西の中學校に於ける、羅甸語保存案に就いて議會で試みた折の贊成演説の中に、獨逸のフイヒテの「獨逸語が明晰である上に思想を明晰にすることの出来るのは一つ一つ語原が明に解つてゐるのに由るのである」と云つた言葉を引いて居ますが、わたくしは此際フイ

ヒテの言葉を次の方向に取つて意味を見出すのであります。即ち我々が言葉を書く事に由つて思想を明瞭にするには、どうしてもこの書く言葉の意味、それからこの言葉の歴史的の考察を施さなければ、次第にこの意味が崩れて、言葉の持つてゐる本來の良好性質と運用の能力とを失つてしまふものだと思ふのです。この見地から今度制定せられた假名遣を見ると、それに何等一定した見識が無い。大體の方向に於てフオネチツク、音に由つて書き現す事を主とするやうですが、併し手爾乎波はやはり「ワ」を「ハ」と書き、それから又長く引張る音は、「オオ」と書かないで「オウ」と云ふ風に書くのは、國語調査會の委員達に於ても全然文字及びオルトグラフィイの歴史主義を無視することが出来ないといふことを自白して居るのであります。若し歴史主義の無視を自覺してゐると云ふならば、今度の遣方は實に中途半端な遣方であります。固よりかういふ問題は嚴格に徹底することは出来ないけれども、今度調査會員の可決した假名遣案は、實に極く初歩の中途半端な遣方であつて、若し將來かう云ふ假名遣の教育を受けた少年子弟中の秀才が、どうして我々はこんな文字を書くのだらうといふ疑問を起した場合には、國語調査會の委員達は、少年子弟に向ひ、更にその疑問を解決すべく努力するために却て以前よりも一層重い負擔を與へる結果になるでせう。人間の知識欲は出来るだけ徹底しよう、根源を窮めようとするものであるからして、少年が相當の年になれ

ば、却て混亂された現在の假名遣をもつと學問的に正さうと企てるやうになるでせう。かう考へると國語調査會の改定案はさうした良い方向の少年子弟の精神的萌芽を幾重にも虐げる遣方であります。一體人類の生活は、若し出来るならば成るべく個人の自由に任せて欲しいものであります。けれども色々な關係から己むを得ずして法律が出来るのでありますが、併し精神的文化の方向に對しては、出来るだけ自由が保存されて欲しいのであります。さうして人が自分の言語、自分の使ふ文字を美しくし、正確にし、或は根據のあるものにしよふといふ努力があるに拘らず、之を法律の力で以て劃一しよふといふのは、精神的文化の自由に對し非常なる苛酷な遣方であると言はなければなりません。近來文部省が軍事教育を學校に入れようとして、その爲に多くの人々が反對し異議を唱へて居ります。今度の假名遣及び以前の漢字制限の如きも、全くそれと同じことであつて、唯だ體操と精神的問題との方向が違ふだけで、やはりいろいろの人が個人的發展をしようとするのを阻止しようといふ遣方は同じです。然るに軍事教育問題に就いてはあのやうに反對しながら、今この假名遣問題に就いては世論が沸騰しないと云ふのは果してどういふわけでせうか。わたくしは遺憾ながら之を目して、日本人が精神的文化といふ方向に對して甚だ冷淡であるといふことの證據であると思ふのです。

次は第二の動機たる能率主義に就いて述べますが、國語調査會がこの假名遣案を斯く

決定したのは、小學兒童の教育の能率を高めようといふ事にあるのださうであります。併し何の能率であるかといふと、その點は甚だ明瞭になつて居ないのであります。小學校に漢字を教へる爲に、或は在來の古典的假名遣を課する爲に兒童の知識を得る能率が弱められるといふのでありませうか。けれども、この煩雜なるものを學ぶ努力の間に兒童の精神的の智能が餘計に磨かれて居るかも知れないのであります。是はわたくしが敢て奇矯の言を弄するので無く、嚮にも述べた通り、昨年佛蘭西に於て中學校の羅匈語教育を廢止するか或は一層之を増すべきかといふ問題が盛に議論された際に、彼國の知名の政治家及び學者が云つた言葉であります。即ち彼等の議論を綜合するに、我々は羅匈語といふものを習ふ爲に非常に努力した。そして今或一派の人々が羅匈語は中學から廢しても宜いといふ議論をするのに、そのやうに明瞭な美しい議論をされたのは、結局お互が精神教育を羅匈語に由つて受けた結果である、と云ふのであります。かういふ風に考へて來ると、兒童の教育の能率を増すといふことは、實は國語調査會の人々がさう明瞭に意識して居ないかも知れませんが、その本來の意味は次の如きであらうと思ひます。

今日の文化教育の方向には精神文化的教育と自然科學的教育との大きな二つが對峙して居ますが、前者には古典教育が主となつて居て、その不便のゆゑに自然科學的教育

の方面の能率を増すことが出来ない。即ち今まで曖昧に且つ漫然と能率が悪いとか良いとか云つてゐるのは、精神的文化教育の能率の方では無く、この後者の教育の能率を云ふのであります。物理學其他の自然科学を能く教ふべきか、古典的精神文化教育を能く教ふべきかといふ根本問題に先づ決すべきものがあるのに、それに氣が付かず、漫然と能率といふ風なものを漁つて居たのであります。この問題は非常に厄介な問題で、今直ちに之を決定し去ることは出来ないであります。併しながら若し古典へ向つて行く——古典を遠景とする所の精神文化教育が廢れて、單に自然科学といふものが盛になつた文明といふものを想像して見たらばどうであらう。吾人は今之に對する結論をしないけれども、所謂アメリカニズムとはさう云ふ文明の空氣を髣髴せしめる言葉では無いかと思ふのであります。精神的文化的教育と離れた自然科学的教育といふものは、既に我々がその缺點を感じつつあるのであります。

それから第三に重大なる動機が無意識の間に今度の假名遣や前の漢字制限の決定を助けてゐるといふ議論に移りますが、それは國語調査會の各委員及びそれに雷同する人々の間に明に自覺されなかつたことながら、今や日本の文明が或は一轉化に向ひつつあるといふことを事實に表示するものであります。即ち日本人は印度及び支那の文化、概して所謂東洋的文化——近頃人に知られて居るその代表者としてはタゴオルがあり、

辜鴻銘又は孫文があります。さういふ風な東洋的文化の方向からして、泰西の文化に移らうといふ一轉化のモメントに立つて居ます。かう云ふ際の國民の無意識的欲求が知らず識らずの間に動いて、今度の假名遣問題の決定を見る重要な一つの動機になつたとわたくしは考へるのであります。例へば、日本語といふものは貧弱であつて、或は漢語を借りなければ到底細かいことを言ひ現はすことの出来ない場合が多く、この事は西洋の心理學的若くは文學的著述を翻譯して見ると最も容易に解りますが、普通に用ひて居る日本語では到底之を現はすことが出来ないであります。その爲には可なり多くの漢字と漢語とを用ひなければなりません。試みに「美しいもの」と「好いもの」とに關する意味を現はす日本語の種類を擧げて見れば直ぐにこの事が感ぜられます。若し文部省が制限した漢字の範圍に従つて我々が感情なり思想なりを現はさうとする場合には、多くの漢字制限論者が夢想するやうに、その爲に日本語が自然に豊富になるといふことは決して無いのであります。そんな場合にはどうなるかと云ふと、今まで用ひて來た漢字及び漢語の代りに、我々の文章へ英語なり佛語なり獨逸語などが盛に這入つて來ることになります。即ち外國語が國語に混つて這入つて來るのであります。でありますから、漢字制限の方針を突き詰めて行くと、我々が今よりも遙かに多くの西洋語を用ひなければならぬ状態を招致します。即ち東洋文化から西洋文化へ遷る無意識の

傾向が國語國字の上にも現はれて行きます。さうなると、多くの人々が教育の能率を増すと云つてゐる事が略ぼ解決されるやうに思ひます。即ち彼等が今日無意識に言つてゐる所の「漢文は覺えなくてもよいから、西洋語を能く覺えさせて、外國語に能く通じさせよう」と云ふことに結局なるのであります。大勢がさうなるならどうも仕方が無いとして、さてさうなると更に新しい問題が起ります。前に述べた通り、人間は必ず徹底しなければ承知しない性質を持つて居ますから、西洋語の助けに依つて文章を書く中には、その西洋語を日本化させる。——日本人はよく同化するから——さうすると今度は西洋の古典といふもの、即ち希臘語及びその歴史傳説、羅甸語及びその歴史傳説といふ風なものを詳しく究めなければほんたうに承知しないやうになるのは當然です。そこで一方に東洋の精神的文化の古典は捨てたが、西洋の精神的文化の古典を澤山學ばなければならぬことになります。さうして又それを學生に負擔せしめなければならぬことになります。若しそれでは困るといふたならば、精神的文化の方向に於て日本國民を悉く中途半端な植民地的人物に墮落させるものであります。若し國語調査會の委員達が、東洋の古典から去つて西洋の古典に就かせ、東洋主義から西洋主義に就かせると云ふ事が日本の國民を良くするといふ風に考へるならば、それは一つの見識であるかも知れないが、それがために學生の負擔が軽くなるといふ風に考へたら、それは大間違であります。

す。かく考察してみると、漢字制限や新假名遣の問題は、一見限られたる問題のやうに思はれるかも知れないが、その哲學的背景を取つて審に論らふと非常なる大問題に面接するのであります。果して國語調査會の當局者はそれだけの覺悟があつて議決したものであるか、どうか。

わたくしの述べたいと思つた所の大體の趣旨は以上の如くですが、猶わたくしが假名遣及び漢字といふ問題に對し功利的の考を附加へて云ふと、日本人は特殊の歴史からして東洋の學問を研究するのに便宜を持つて居ます。加ふるに東洋に於て最近數十年來泰西の文化をも研究する路を開いて居ます。然るに支那は現在のやうな状態に在ります。支那自身が現在無爲にして遣しつつかある大問題、即ち支那を研究するといふことは、それに就いて日本の學者が最も良い位置に在るのであります。それで今我々が漢字を用ひ漢語を読むといふことは、少くとも支那の研究に、その文化的方面のみならず、經濟的方面に於ても有力なる後援となるものであります。日本の文化の轉化が前段に豫想したやうに層一層泰西主義に傾くことがあるかも知れませんが、少くともそれまでに、現に我々が漢字に對する理解及び同情を持つて居る間に支那の研究をしなければならぬと思ひます。かういふ有力な後援は泰西の諸國に於て決して見出すことが出来ない。即ち我々は東西の文化を味ひ咀嚼することに於て非常な贅澤な位地にあるので、

この位地を維持し善用しなければならぬと思ひます。我々は漢字のみならず、さういふ文化生活をなすためには非常に豊富なる材料を有つてゐることを思うて自愛しなければなりません。